

もうすぐ七夕ですね。みなさんは織姫と彦星の話を知っていますか。織姫の星は難しい言い方で「織女星」もしくは「せいでい」。彦星は「牽牛星」もしくは「せいでい」とも言います。

高学年の人たちは、織女星は、こと座のベガで、牽牛星はわし座のアルタイル。おまけに、はくちよう座のデネブを加えて、「夏の大三角形」と呼んでいるなんてことも知っている人がいるのではないのでしょうか。

今日はみんなの知っている話ではなく、ちよつと変わった七夕の話をします。『中国の民話 上』村松一弥編（毎日新聞社）という古い本に出ているお話です。舞台はモンゴル。なるべく短くかいつまんでお話ししましょう。

主人公は織姫と牛飼い。それに言葉話すことができる賢い牛さん。牛が言うことには、「七月七日の日、天帝（天の王様）とその奥さんの西王母（せいおうぼ）の七人の娘さんが洗濯をしたら谷川に降りて来る。そのうちの七番目のお嬢さんが織姫だ。お前は、織姫のほした着物をこっそり隠すのじゃ。もしも返す時が来たら、わしを三度呼べ。」

牛飼いは牛の言った通りにしたところ、天に帰れなくなった織姫は、牛飼いと結婚することに。どんどん月日がたち、二人の間に生まれた女の子はもう六歳。下の男の子は三歳に。

ある日、織姫に「子どもたちも大きくなつ

たのだから、もういい加減に着物を返してくださいな。」と言われた牛飼いは、「それもそうだな。」と、着物を返したその日の夜中、織姫は天に帰って行った。

そうこうするうち牛が現れて、「着物を返すなら、わしを三度呼べと言ったじやろが。もうこうなつては手遅れだ。わしを殺して、皮を剥ぐんだ。それを身にまとつて、骨や肉は燃やせ。それから、かごを二つ編んで子ども二人を入れ、天秤棒で担ぐのじゃ。そして目をつむつたまま天まで歩け。」

天の南天門には、金の獅子が門番をしている。そいつがお前を食い殺そうと襲つてきたら、「おいこら、そうはさせんぞ。俺は七番目のお嬢様の婿どのだ。」。二番目の門の銀の獅子にも、三番目の門の、とげのある金棒を持った鬼にも同じことを言うのじゃ。そうすれば奴らはひれ伏す。

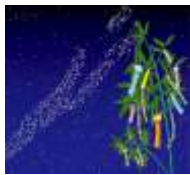
こうして牛に言われた通り、牛飼いは牛の皮をまとい織姫に会うことができた。西王母は小さな家に牛飼い一家を住まわせた。

婿どののことが気に食わない天帝は、牛飼いと勝負して一泡吹かせてやろうと思いついた。天帝は変身ができる。織姫は「明日、お父様は、南京虫に変身して南側の塀にくっついていてはす。庭をくまなく探すふりをして、南京虫を見つけて。それがお父様です。」

牛飼いは織姫の言った通りにして、南京虫に変身した天帝を見つけ出し、一勝。次の日

サンザシの実に変身し、つづらに隠れた天帝を見つけ出し二勝。今度は牛飼いが隠れる番に。織姫は牛飼いを銀の針に変身させ、刺しゅうをしているので、天帝は牛飼いをついに発見できず、またまた牛飼いの勝ち。次の日は追いかけてついで勝負。牛飼いが逃げ、天帝が追いかける。牛飼いは織姫に言われた通り、天帝の蔵から赤い箸と赤いコウリヤン取り出して、逃げながら箸とコウリヤンをばらまいていく。それを拾いながら追いかける天帝。

そして、いざとなつたら、織姫の金のかんざしを前に振るよう言われた牛飼いだつたが、天帝がすぐ後ろに追いついてくる。あまりの恐ろしさに、後ろを振り向きざま、金のかんざしをさつと一振り。するとどうだ。あつと一瞬間に天の川ができて、牛飼いは川のこちら側に、織姫や天帝たちは川の向こう側に。牛飼いと織姫は泣きながらお別れすることになったのだそうなの…。



今年は、八月四日（木）が旧暦の七月七日。伝統的な七夕の日。ぶどう棚の下にいと織姫が牛飼いに「あれほど前にかんざしを振りなさいと言つてたのに…。」「あゝあ。」という二人の会話が聞こえて来るそうですよ。

（立教小学校校長 田代 正行）